Kafka

カフカ全集 11

決定版

カフカ全集 11

マックス・ブロート編集

フェリーツェへの手紙(II)

城山良彦 訳

新潮社版

F. Kafka

決定版カフカ全集11
フェリーツェへの手紙（II）

印刷　1981年4月20日　発行　1981年4月25日
翻訳者　城山良彦
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
〒162 東京都新宿区矢来町71・振替東京4-808
業務部 (03)266—5111／編集部 (03)266—5411
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　神田加藤製本株式会社
定価 3200円
©1981, Shinchosha. Printed in Japan

（乱丁・落丁本は，ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。）

カフカ全集第十一巻　目次

手　紙 …… 365
一九一三年五月二八日〜一九一七年一〇月一六日
グレーテ・ブロッホ略記 …… 438
付　録 …… 711
年　表 …… 715
訳者解題 …… 719
人名索引 …… 巻末

〔一九一二年九月二〇日〜一九一三年五月二七日の手紙は第十巻『フェリーツェへの手紙(I)』に収録〕

カフカ全集　第十一巻　フェリーツェへの手紙(II)

——婚約時代の他の手紙とともに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一、手紙におけるカフカ自身の行間及び欄外などの書き込みは、本文中に※1、※2……で指示し、当該手紙の末尾に、本文活字と同じ大きさ（8ポ）で示した。

一、原書における編集者の注は、本文中に（1）、（2）……で指示し、当該手紙の末尾に番号順に従って、本文活字より小さい活字（6ポ）でまとめて示した。原書における本文中の短かい編集者の注は、本文中の〔　〕内（7ポ）に示した。

一、本巻訳者の注は、本文中に割注（6ポ）で示し、特に長いものについてのみ、本文中に＊1、＊2……で指示し、当該手紙編集者の注に続けて示した。

手紙

一九一三年（つづき）

一三年五月二八日

いいえ、ぼくは不安ではありません、フェリーツェ、そうではないのです。しかし、あなたはぼくを欲しいとは思わない、欲しいとは思わないのです。これ以上明瞭なことはありません。しかし仮にあなたがぼくを欲しいと思っているとしたら、その欲求は生ぬるさのため全く目に見えないのです。あなたが十日間ずっとぼくから離れているのに、見かけばかりであなたの手を取る、そんなことは我慢できません。ぼくはフランクフルトの沈黙を、あなたから説明をきくことなしに、耐えました。この最近の沈黙は、ぼくにとってあまりにもひどく、ぼくより十倍も強い人間にとってもそうでしょう。ぼくがあなたを理解していないということを、究極には認めざるをえないとしても、ぼくの判断を裏づける他のことを数えあげるつもりはありません。ぼくは一つ悪いことをあなたにしました。あなたは実際日曜日の晩書きました（手紙は今日になって届きました。郵便局員はぼくのように覚束ない手をしているにちがいありません）、しかし手紙の内容はぼくの不当さを全く帳消しにしています。あなたが月曜日に受取った手紙のなかで、ぼくは絶望のあまり、あなたは書くことがなにもないのだ、と叫びました。火曜日にもなんの便りもなく、あなたの今日の電報は、マックスの手紙のお蔭だと信じる十分な理由がぼくにはあります。今残っているのは、あなたがお手紙の行間において、手紙と手紙の間の休止期間において、とっくにぼくに与えているお別れしかありません。ぼくは繰返しますが、フェリーツェ、ぼくは完全にあなたのもので、これほどあなたが自分のものとしうるものはないのです。しかし、現在の、そしてもう数週間も続いている関係では、ぼくはもうあなたのものではありえません。なぜなら、あなたがただ悩み――それはきっとあなたが残酷ではないからでしょう――ぼくが無意味に追い回されるこのような関係を維持しようとするのは、あなたの本当の姿ではないはずですから。ぼくはそのことをあなたに言わずにはいられませんでした。

フランツ

一三年六月一日

ぼくたちはどうなるのでしょうか、ぼくの哀れな最愛のひと？　もしレーヴィがこちらにいないで、ぼくがこの哀れな人間のため朗読会を催してやる必要がなく（ぼくが言いだして、ピックが書いた予告を同封します。[1] このようにしなければならぬことが幾つかあります）、入場券を売る必要もなく、会場の心配をする必要もなく、そして最後に、レーヴィの抑えることのできないこの情熱の影響をうけず、一見慌しく忙しい状態に陥らなかったならば――この数日間がどうして過ぎたか、分らなかったでしょう。ねえ、ぼくたちは一つであり、それは疑いないこととぼくには見えますが、同様にぼくたちの間の巨大な相違も疑いようがなく、あなたはあらゆる意味で健康であり、だから底の底まで落着いているのに、ぼくは病気で、それも普通の意味でよりむしろ最悪の意味で病気であり、だから不安で、ぼんやりして、気乗りのしない人間です。最初の頃のお手紙と最近数週間のそれとの相違はたしかに存在しますが、しかしそれはおそらくぼくが思うほど重要なものではなく、ぼくが見出すと思うのとは別な意味があるのかもしれません。ぼくに対するあなたの態度も、ぼくが認めることのできるのとは別な意味をもっているのかもしれません。いや、あなたがそう言うのだから、確かに別の意味をもっているのです。そうなのです、あなたはぼくのことで悩み、しかしあなたの言う通り、ぼくに満足しています。そしてぼくはあなたのことで悩み、しかもあるがままのあなたを毫末も違わないで受入れなくてはならないのです。たとえば動物園からあなたが書いたあの手紙のことを考えてください。それは手紙でなく、手紙の亡霊でした。ぼくはほとんど暗記しています。「わたくしたちは午後ずっと動物園で坐っていたあとで、そこのレストランで皆一緒に腰をおろしています。」そう、しかしなぜ、なぜあなたは動物園に坐っていなければならなかったのか？　だってあなたは奴隷ではありません。あなたはうちで旅行の疲れを癒し、ぼくに落着いた五行の文章を書いてよかったのです。「わたしは今ここの机の下で書きながら、ついでに夏の旅行プランのことを話し合っています。」すると、一週間の中断後始めてのこの文章を、あなたは想像もできない状況で書かなくてはならないのであり、それはまたぼくにとって、一週間たってやっとあなたからの一言をぼくがききたくなるのだという非難を意味しているようにほとんど受取れます。しかしそれなら、あなたは手紙を切手なしに投函すればいいので、そうすれば手紙は三日遅れて着き、また三日間もう書かないでいいと思えるでしょう。――ところで、ぼくはなにか優しいことをあなたに言いたかったのです。ぼくの心底にはあなたに対する愛しかないのですが、いつも苦い

ことが飛び出します。むしろ涙が出て、お互いに抱きあえばいいのですが！

フランツ

（1）付録を参照。

〔一九一三年六月二日〕

ぼくのうしろにレーヴィが坐り、朗読しています。いいえ、フェリーツェ、ぼくが彼のことで忙しいから、あなたに書かなかったのではありません。あなたへの思いを取り去るほど、ぼくがどうして忙しいことがありましょう？しかしぼくはお手紙を待っていました。ぼくたちは落着いて、なにごとにも妨げられず、お互いに書くよう、ぼくは今どんなにあなたに誓いたいことでしょう。しかしぼく自身の保証はできません。そこで、最愛のひと、仮りに考えてみてください――もっとも疑いないというわけではありませんが――ぼくをこんなにしているのはただ離れているだけでなく、近くにいてもそうであり、しかも絶えずそうなのだと。ただ一面ではもっとずっと絶望的なのであり、他面ではもっとずっとぐったりしているのだと。そしてこのことを考えながら、ぼくはお父様への手紙という考えを絶えず心に抱いているのです。

最愛のフェリーツェ、どうかまた以前とおなじように、あなたのこと、オフィスのこと、女友達のこと、家族のこと、散歩のこと、本のことを書いてください。ぼくが生きるためそれがどれだけ必要なことか、あなたは知らないのです。

あなたは『判決』になにか意味が、つまり直接の、筋の通った、脈絡のある意味が見つかりますか？　ぼくには見つからず、そのなかのことはまた何も説明できません。しかしそれには多くの奇妙なことがあります。名前を見てごらんなさい！　それは、ぼくがあなたを既に知り、世界があなたの存在のため価値を増してはいたけれど、まだあなたに書いていなかった時に書かれたものです[1]。そしてごらん、ゲオルクはフランツとおなじ字数で、「ベンデマン」はベンデとマンから成り、ベンデはカフカとおなじ字数、二つの母音もおなじ場所にあり、「マン」はおそらく同情からこの哀れな「ベンデ」をその戦いのため強くしようというのです。「フリーダ」はフェリーツェとおなじ字数で、またおなじ頭文字をもち、「フリーデ」〔平和〕と「グリュック」〔幸福〕はまた緊密な関係があります。「ブランデンフェルト」は「フェルト」〔畑〕によって「バウアー」〔農夫〕とある関係をもち、おなじ頭文字をまたもっています[2]。そしてこうしたことはまだいろいろあり、もちろんそれは、後になってぼくが見出したことばかりです。ところでこの全体は、十一時から朝の六時まで一夜で書かれました。金

切り声をあげたくなるほど惨めなある日曜日のあと、書くために腰をおろしたとき（午後の間ずっとぼくは、始めてうちにきた義弟の親戚の周りを、黙ったままうろついていました）ある戦争を書こうと思いました。一人の若い男が窓から、多勢の者が橋を渡って近づいてくるのを見ているはずでした。ところが、すべてはぼくの手元で違ったものになってしまいました。――さらに大事なこと――最後から二つ目の文章の最後の言葉は、「落ちる」hinabfallen であって、「倒れる」hinfallen ではありません。さて、これですべてまた良くなったでしょうか？

フランツ

（1）物語『判決』はフェリーツェ・バウアーへの彼の最初の手紙のあと二日して出来たもので、一九一二年九月二二日から二三日の夜である。『日記』（一九一二年九月二三日）参照。

（2）『日記』（一九一三年二月一一日）参照。

一三年六月〔六日と〕七日

まあ、フェリーツェ、これがどんなに悲しいことか、見てごらん。月曜日にあなたは、これからまた毎日ぼくに書くつもりだと書きました。火曜日にその手紙をもらい、水曜日にその返事をあなたは受取りました。いま金曜日の晩で、ぼくは一行もまだ受取りません。あなたがぼくに「同情からでなく」、別の理由から書くつもりだということを、ぼくは残念がる必要はないのでしょうか。というのは、同情からあなたが書くのなら、もうとっくに手紙をもらっているでしょう。繰返しあなたは、守れないことを約束します。これはあなたらしくないことです。

フランツ

〔翌日、一九一三年六月七日〕

ぼくは今朝前の手紙をうちに忘れて出ました（今いつも急いで出なくてはならないのです。両親がフランツェンスバートに行って、ぼくは朝も午後も店に行かなくてはなりません。それに今度はオットラも喉を痛めて床についています――しかしぼくはなんのためにこんなことを言うのでしょう、こうしてまたもう、あなたの心を動かそうとしているのでしょうか？　いいえ、そんなつもりはありません。そんなことは無益だと知っていますから、尚更そんなつもりはありません）。その後ぼくはまた、朝手紙を出さなくてよかったと嬉しく思いました。今日なにか便りが来るはずでしたから。なにも来ませんでした。ぼくは、あなたがそれを知らないかのように、書いています。しかし、あなたは知っており、そう望んでいるのです。手紙が紛失したかもしれない、なんてぼくはもう考えません。書かれた手

紙は紛失しません。紛失するのは、書かれなかった手紙だけです。しかしなぜこうなのですか？　なぜ？　なぜあなたはただもう無益にぼくをいじめるのですか？

一三年六月七日

いま夜の十一時半にハイキングからうちに帰ると、待ちうけていた、というよりもう待ちうけていなかったお手紙がありました。ではお手紙が一通本当に紛失したのですね。ぼくはそれが届かないので幾週間も苦しみました。そしてその間にどんな亡霊があなたに現われて、見たところあなたの口を開かせたのでしょう？　そう、それについては明日詳しく書きましょう。ぼくはただ、本当は今日もそしていつも遠くからしかキスする勇気がなく、またキスできないその口が、まだぼくに優しい言葉をもっているので幸福なのです。今はおやすみなさい。あなたの疑いは後退りではないでしょうね？　あなたが無意識ながら心に懸っている本当のことを、まだ言っていないとしても、とにかく語るということで、ぼくはどんなに嬉しいことでしょう。しかし最初の言葉は言われたのだから、ぼくらが完全に自由に決断が下せるよう、さらに他の言葉を引き出すことにしましょう。そして今は眠ることです。いいえ、ぼくは相変らず眠れないし、いよいよそうなるでしょう。しかし今日は眠れるかもしれません。

フランツ

紛失した手紙には何が書いてあったのですか？　もっと丁寧にアドレスを書くこと！

ぼくは一度妹さんのエルナに挨拶を送りたいのですが、アドレスを教えて頂けますか。

一三年六月一〇日

あなたは病気で、病気のまま走り回っているのですか？　むしろ医者に行かないで、うちにいて、体を休めた方がいいでしょう。あなたの看病ができればいいのですが。

とにかくぼくら二人は休養が必要です。同じ欲求をもつぼくら二人が、同じ場所へ出かけるほど自然なことがあるでしょうか？

ぼくがあなたを好きかどうか、あなたはきく必要はありません。時々ぼくには、すべてひと気がなく、あなただけがベルリンの廃墟に坐っているかのように思われます。

金曜日のお手紙にはもちろんまだ返事を書いていません。むしろ返事のために一つの論文を用意していますが、まだ出来上りません。時間がないからでなく、とっくに服従を拒んでいる頭の弱さ、不確かさのためです。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

なにかの偶然でレーヴィについての予告がぼくの前にあり、これがそれです。[1] 朗読はかなりまずい結果に終りましたが、とにかくレーヴィはまたいくらかの金を得、他に今のところ助ける方法はありません。彼が語るとき、あなたに聴かせたいものですが。どんな朗読、朗誦、歌よりも、彼は語るのがうまく、そのとき彼の情熱は本当に人の心に伝わります。

『判決』は説明できません。いつかこれについての日記の箇所をお見せするかもしれません。物語は抽象に満ちていますが、そうとは認められません。友人はほとんど現実の人間でなくて、むしろ父と息子に共通するものかもしれません。物語は父と息子の周りを巡回するものかもしれず、友人の変化する形姿は、父と息子の関係の遠近法的変化かもしれません。しかしそれについて、ぼくは確信あるわけでもありません。

今日『火夫』をお送りします。少年を優しく迎え、あなたの横に坐らせ、彼が望む通りに褒めてやってください。

明日は医者が言った愚にもつかないことについて詳しい報告をお待ちします。ところでそれはだれですか？　おうちのホーム・ドクターですか？　名前はなんといいますか？

ねえ、ぼくはしかしこの手紙で、あなたがプラハに来ることを妨げるつもりはありません。さあおいで、おいでなさい！　あなたは待ち望まれているのだから。

フランツ

（1）おそらく、すでに言われた六月一日付《ブラーガー・タークブラット》紙の予告のこと。それ以外のものはとにかく残っていない。付録参照。

一三年六月一三日

決断のつかぬまま、ぼくは筆をとりあぐねています。もうまたお手紙の中断ですが、これはもう数か月前から続いていました。丁度ぼくの手紙がもう数か月前からお便りのお願いだったように。あたかもあなたが便りを待つ人の悩みなど考えてみることもできない、全く無縁な人であるかのように。そしてこの中断は、あなたのせいではないかもしれませんが、いつもあなたの方のことでした。そして今また。もうあなたがほのめかしていたように、ご病気なのでしょうか？　それももう、ぼくは正しく考慮することはできないでしょう。いつか最初の頃おうちに「ご病気ですか？」と電報をうち、それでただ愚行を演じたにすぎないことを思い出します。そしてまた、先日電話がつながるのを二時間待ち、その間みすぼらしい郵便局のみすぼらしい待合室で、お母様に訴えてあなたの状態についての知らせを強いて受取ろうという手紙の文面を考えて――そして

やっとあなたの健康な明るい声をきき、無邪気に「いかが？」とあなたが訊ねたときのこと。今朝からぼくは、ブリュール嬢に電報をうつことを考えていますが、おそらく実行はしないでしょう。

どうか、どうか、フェリーツェ、あなたが健康なら、一言書いてください。むろん病気だとしたら――やはりそれもありうることで、自分の予感能力はもうとっくにぼくは信用していません――その場合、どうなるか分りません。その場合このぼくに残るのは不安と恐怖だけです。なぜなら、ぼくが行動でどうにもならないのに、願望でなにができるでしょう。しかしそれでも一つの便りが得られるかもしれません、あるいは妹さんからでも。しかし、ぼくはだれに話しているのでしょう？　この手紙をあなたは受取らないかもしれないし、同様ぼくはこれを机上に置いたままにするかもしれません。

フランツ

これはあなたのために用意した日曜日の手紙です。これ以上よくは書けませんでした。今ベッドのなかで、水曜日に書かれ、金曜日の晩投函された速達を受取りました。ぼくはほとんど満足し、悪いことはすべてあまりにも容易に忘れます。一番目立ったのは、題材集めと特定の機会に詩作する詩人の話でした。それは一方で恐しいことですが、他方ではしかし奇妙なことに全く異民族のことなのです。なんという風習でしょう！

〔一九一三年六月一五日〕

愛するフェリーツェ、今日は書くのがむつかしいのです。もう遅いからというのではなく、明日――手紙は本当にくるでしょうか？――くるはずの手紙は、あなたから強いてもぎ取ったものだから。電報でもぎ取ったのだから。あなたの守護神は、書くことを、長い日曜日でも禁じていたのに、ぼくはその守護神と戦ったのです。それが実際勝利であるとしても、恥ずべき勝利です。一体ぼくはあなたからなにを望むのか？　なにがぼくを駆り立てて、あなたの後を追わすのか？　なぜぼくは諦めず、徴候に従わないのか？　あなたをぼくから自由にするという口実のもとに、ぼくはあなたに自分を押しつけています。どこに限界が、出口があるのでしょう？　あなたがぼくにとって失われたと信ぜざるをえないとしたら、すぐに粗大な、遠近法的な錯覚が現われ、どこかにあるかもしれぬ、微小な、ほとんど見えない、決して出会うことのない出口は、そのとき夢のように大きな、美しい形をして、ぼくはまたあなたの方へ突進し、そしていきなりまた停止するのです。しかし、ぼくは自分の苦しみだけでなく、ぼくがあなたに与える苦

しみも、さらに一層感じています。

フランツ

一三年六月〔一〇日から〕一六日[1]

最愛のフェリーツェ、たった今ぼくは、床に就いている妹とそのそばにいる女家庭教師と少しばかり言葉を交したところです。妹はおとなしく善良であり、女家庭教師はとても従順なのですが、それでもぼくは二、三の言葉を言うにも極度にいらだち、彼女たちは質問してぼくを引きとめようとしたのに、ただ部屋を出たい一心でした。ぼくのいらだちは、妹や女家庭教師の方にはいささかの理由もなく、そのいらだちを表明する機会もなかったので、この恥ずべき状態のまま引っ込んで、あなたへの手紙になんらかの浄化を求めざるをえなかったのです。しかしその点でもぼくは自信がありません。なぜなら、今日はお手紙を受取らず、もしあなたの新しい言葉に縋ることができなければ、ぼくは空無のなかにあるような気がします。

ところでお父様はもうお帰りだそうですが、手紙は相変らず書いていません。しかしまたこの前のお手紙は、久しぶりにあなたがなにかを「卒直に正直に」きこうとし、自ら囚われた気持やだんまりを改めている最初の手紙かもしれません。

あなたはもうきっとぼくの奇妙な状況を御存知のはずです。ぼくとあなたとの間には、他のすべては別にしても、あの医者が介在しています。彼が言うであろうことは疑わしく、そのような決断のときには、医学的診断はあまり決定的なものでなく、そんな風なら、診断を求めるのは無駄なことでしょう。ぼくは既に言ったように実際病気ではないのですが、それでもやはり病気なのです。違った生活状態がぼくを健康にするかもしれませんが、その違った生活状態を呼び出すことは不可能です。医学的決定（今もう言うことができますが、ぼくにとって無条件に決定とはならないでしょう）のときには、知らない医者の性格が決定的となるでしょう。たとえばぼくのホーム・ドクターは、鈍感で無責任なので、いささかの障害も認めないでしょう、その反対です。別の、もっと良い医者は、驚いて頭上で両手を打ち合わせるかもしれません。

よく考えてください、フェリーツェ、この不確かさに面して言葉は出しにくく、奇妙にきこえるにちがいありません。それを言うには早すぎます。しかし後になってはまた遅すぎますし、あなたがこの前の手紙で触れているようなことを議論する時間はなくなります。しかし長くためらう時間はもうなくて、少くともぼくはそう感じるので、ぼくはお訊ねします――あなたは、上のような、残念ながら除去できない前提のもとに、ぼくの妻になる気があるかどう

か、考えてみるつもりがありますか？　どうでしょうか？

ここで数日前ぼくは書くのをやめ、それから続けませんでした。なぜできなかったか、ぼくには大変よく分ります。結局のところ、ぼくがあなたに提出しているのは犯罪的質問であり（それをぼくはまた今日のお手紙で気づきました）、しかしこうした力の拮抗のうちで、この質問をせずにはいられない力が勝つのです。

あなたが同等とかそれに類したことについて言っているのは、もしそれによって（もちろん自分では無意識に）他のことを隠そうというつもりでないならば、全くの空想にすぎません。ぼくは無価値な人間、全く無価値な人間です。ぼくがあなたより「すべてにおいて進んで」いるのですって？　少しばかり人間を評価し、人の身になってみること、それはぼくにもできますが、長い間平均して、それもこの人生のなかで、ぼくより人間づきあい（それ以外のなにが問題でしょうか？）の点で惨めな人に会ったことがあるとは思いません。ぼくは習得したことにも、読んだことにも、体験したことにも、きいたことにも、人間にも出来事にも、記憶力がありません。ぼくはなにも体験したこと、習ったことがないような気がします。実際大概の事柄について、ぼくは小学生より知ることが少く、ぼくの知っていることは、ひどく表面的で、二度目の問いにはもう答えられません。ぼくは考えることができず、考えているとき絶えず限界にぶっつかり、個々のことは飛躍していくつか理解できますが、連関をもち展開していく思考は、全くぼくには不可能です。ぼくはまた本当に物語ることができず、いやほとんど語ることさえできません。ぼくが物語るときには大概、始めて歩こうとする幼児のような気持です。赤ん坊たちは自分の欲求からでなく、成人した、立派に歩く家族の者がそう望むので歩こうとするのです。そういう人間に自分が同等だとあなたは感じるのですか、フェリーツェ、陽気で生々して、自信があり健康なあなたが？　ぼくの持つ唯一のものは、通常の状態では全く認識できぬ深みにおいて、文学に集中するなんらかの力ですが、ぼくは自分の現在の職業的肉体的な状態では、その力に身を委ねる勇気は全くありません。というのは、この力の内的な督促すべてに対し、少くとも同様に多くの内的な警告が対立しているからです。もしこの力に身を委ねることができれば、それはもちろんぼくを一気にこのすべての内的な悲惨から救い出してくれるだろうと、ぼくは確信します。

ただ同等という問題を理論的に述べるために――というのは、今言ったようにそれは実際的には、少くともあなたの言う意味では問題になりませんから――なお付け加えねばならないのですが、あなたが幸福な結婚のため必要と考えているらしい、教養、知識、高尚な努力や見解などでの同様な一致というものは、ぼくの考えでは第一にほとんど

不可能で、第二には副次的なものであり、第三には決して良いものでも願わしいものでもないということです。結婚生活が要求するものは、人間的な一致、つまりすべての意見のずっと下にある一致、検証されるのでなく、ただ感じられる一致、つまり人間的に共同生活する必然性です。それによってしかし、個人の自由は少しも妨げられず、自由が妨げられるのはただ必然的でない人間の共同生活のためで、われわれの生活の大部分はそれで成り立っているのです。

あなたは、ぼくがあなたとの共同生活は耐えられないだろうというのは考えうることだ、と言います。それであなたは正しい点にほとんど触れているのですが、ただあなたが考えるのとは別な面からのことです。ぼくは自分が人間づきあいには見捨てられていると実際信じています。個々の人と、絶えまない、生々と展開する会話を行うことは、ぼくには全く不可能です、個々の例外的な、おそろしく例外的な時は別ですが。たとえばマックスとは、互いに知り合ってから多年、もうしばしば二人だけのことがありました、幾日も、旅行では幾週間も、ほとんど絶えまなく。しかしぼくは、彼と大きな、連関のある、ぼくの全存在を熱中させるような会話をした覚えがありません――あれば、きっと良く覚えているでしょう――、これは固有の活潑な意見や経験を広くたくさん持っている二人の人間がおち合えば、当然起ることでしょうが。そしてマックスの（また他の多くの人の）モノローグを、ぼくはもう十分にききましたが、それにはただ声高な、大概はまた沈黙した返答者が欠けていました。

（最愛のひと、遅くなって、手紙が出せないでしょう、これはまずい、そしてなおまずいのは、手紙が一気にでなく、切れぎれに書かれていることです。それも時間がないからでなく、不安と自己苛責のせいなのです）。ぼくが一番我慢しやすいのは、慣れた場所に二、三人の知人といるときです。そのときぼくは自由で、絶えず注意し協力しなければならないという強制がなく、その気になればいつでも、ぼくが好きなように長くも短かくも、仲間に加わることができ、だれもぼくが居なくても困らず、だれにもぼくは不快感を与えません。さらに、ぼくの心を捉えるような、知らない人がだれかおれば、いよいよ良いので、ぼくは一見借りもののような力で全く生々してくるのです。しかし知らないうちで、幾人か知らない人、あるいはぼくがよそよそしく感じるような人の間にいると、部屋全体がぼくの胸にのしかかり、ぼくは身じろぎもできず、そうすると一見それこそぼくという存在が人々の心を捉えるようにみえ、すべては絶望的になります。たとえば午後あなたのうちにいたときがそうであり、[2] 一昨日の晩ヴェルチュの叔父さんのところにいたときがそうで、つまりぼくには訳が分らな

いのですが、ぼくをそれこそ愛している人々のところにいるときがそうなのです。ぼくは大変よく思い出せますが、自分はあそこのテーブルに寄りかかり、すぐ並んで家族同様のお手伝いがいて――これほどぼくの気に入る娘さんはプラハにいません――ぼくはこの善良な友人たちを前にして、一言もまともな言葉が吐けませんでした。ただ前をじっと見つめ、ときどき無意味なことを言いました。ぼくがテーブルに縛りつけられていたとしても、あれ以上苦しげに、わざとらしく立っていることはできなかったでしょう。そのことではまだたくさん話すことがありますが、今はこれで十分です。

そうすると、ぼくは孤独に生まれついているのだ、と人は信じるかもしれません――あとで自分の部屋にひとりになると、ぼくは万事に絶望的ですが、比較的に幸福でもあり、良き友フェーリクスと少くとも一週間は会うまいと決心します、羞恥心からではなく、倦怠感から――しかしぼくは、書いているとき以外は、自分をどうしようもありません。たしかに、ぼくが他人にふるまうように自分に対したら、とっくにぼくは粉々になっているでしょう、しかしそれに近い状態はもうしばしば経験しています。

さてフェリーツェ、結婚によってぼくらにどんな変化がおきるか、めいめいがなにを失い、なにを得るのか、よく考えてください。ぼくは自分の大部分は恐しい孤独を失い、そしてすべての人間よりも愛するあなたを獲得するでしょう。しかしあなたは、あなたがほとんど満足していたこれまでの自分の生活を失うでしょう。あなたはベルリンを失い、あなたを喜ばせるオフィスを、女友達を、小さな生活上の楽しみを失い、健康で陽気な善良な男性と結婚し、考えてみれば、それこそ憧れている美しい健康な子供達を得る見込みを失うでしょう。この測りしれないほどの損失の代りに、あなたは病気で弱い、人づきあいの悪い、無口で陰気な、ぎこちない、ほとんど絶望的な人間を獲得するでしょうが、彼の唯一の徳はおそらく、彼があなたを愛するという点にあるのでしょう。あなたは実際の子供達のため自分を犠牲にする――それが健康な少女であるあなたの本性にふさわしいでしょうが――代りに、この人間のため自分を犠牲にしなければならないでしょうが、彼は子供っぽく、しかし最悪の意味で子供っぽく、おそらく最善の場合でも文字通りあなたから人間の言葉を習うことになるでしょう。そしてすべての細かい事柄においても、あなたは失うでしょう、すべての点で。ぼくの収入はあなたのそれより大きくないかもしれず、一年に丁度四五八八クローネで、年金資格はありますが、収入は公務員に似た勤務ではそうなのですがほとんどわずかしか昇給せず、両親からはあまり期待できないし、文学からは全然期待できません。つまり、あなたは今よりずっと慎ましい生活をしなければなら

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com